

藤原書店創立 20 周年記念出版

# 身体の歴史

(全3巻)

Histoire du corps

A・コルバン + J・J・クルティエヌ + G・ヴィガレロ編

小倉孝誠・鷺見洋一・岑村傑監訳

A 5 上製 各予 512 ~ 640 頁 (口絵カラー 16 頁) 各予 6,800 円

我々の「身体」は歴史の産物である。

## 第I巻 16-18世紀 ルネサンスから啓蒙時代まで

この巻が論じるのは「近代的」身体の誕生である。宗教的なものへの参照がなくなったということではない。ただ、身体がその自律性において個別化していくルネサンス期とともに、文化的な葛藤が激しくなった。それに加えて、自我の境界線や欲動や欲望にたいして、近代性が強い作用を及ぼした。すなわち、親密性の世界における礼儀作法や社交の管理、暴力の希薄化、身ぶりの自己監視、といったことである。個人の解放がいっそう進むと同時に、集団的な束縛が強化されたのである。

## 第II巻 19世紀 フランス革命から第一次世界大戦まで

学者は身体を操作したり、解剖したりする。しかし解剖学者や生理学者が扱うこの身体は、苦しみ、喜びを感じる身体とは根本的に異なる。ところが科学と働きかけの対象としての身体、ものを生産し、体験する身体、同時代の技術と科学の世界に組み込まれた身体と、快楽や苦痛を感じる身体のあいだに横たわる緊張関係を、歴史家はたいていの場合忘れていた。本書が試みるのは、これら二つの観点の均衡を取り戻すことである。臨床=解剖学的な医学の発達、麻酔の発明、肉体関係をめぐる想像力の形成、性科学の誕生、体操とスポーツの発展、産業革命は何をもたらしたか？

## 第III巻 20世紀 まなざしの変容

20世紀以前に、人体がこれほど大きな変化を被ったことはない。肉体が直接感じとったこの深い変貌は、身体に向けられたまなざしの変化でもある。いたるところで医療化された社会における健康と病、正常な身体と異常な身体、生と死の関係の推移、過去から受け継がれた諸学問の衰退、快楽の正当化、生物学的、政治的な新しい規範と権力、個人的安楽の追求と激しい集団的暴力、愛情生活における肌のふれあい、性的見せかけの冷淡さが公共空間を飽和させている状態。幸福であると同時に悲劇的なこの20世紀に身体を問いかけるのは、いわば人間性とは何かと問うことではないだろうか。ヴァーチャルな身体が増殖し、血液や臓器が交換され、機械的なものと有機的なものの境界線が曖昧になる時代にあって、「私の身体はつねに私の身体なのだろうか？」

藤原書店

東京都新宿区早稲田鶴巻町 523 tel 03-5272-0301 fax 03-5272-0450 info@fujiwara-shoten.co.jp

# 身体の歴史への招待

小倉孝誠

## 自然と文化が出会う場

われわれはみな身体によって生き、身体によって活動し、身体によって他者や世界と関わりをもち、そして身体の機能停止によって死を確認される。要するに、身体はわれわれにとってもっとも根源的で、もっとも近いものである。しかしながら、もっとも自明な所与というわけではない。自分の身体が、あるいは他者の身体が実在するという事は経験的に明らかなのだが、意識や感覚や思考をとおして身体を認識するしかたは個人によって、社会によって、そして時代によって異なる。その意味で身体とは自然と文化、現実と想像力が遭遇する場にほかならない。

このように複雑で、繊細で、多義的な身体をめぐる医学、哲学(とくに現象学の流れ)、社会学、人類学、精神分析学など、さまざまな知の領域が分析のまなざしを向けてきた。現代社会においても、臓器移植、摂食障害、美容整形、性同一性障害など、身体をめぐる話題には事欠かない。

歴史学にとっても、近年、身体とそれに付随するテーマは特権的な対象になってきた。このたび邦訳が刊行されることになった『身体史の歴史』(全3巻)は、フランスで2005年から翌年にかけて出版されたシリーズで、十六世紀ルネサンス期から現代までの身体史のあり方を明らかにする、文字どおり身体史の集大成である。ヴィガレロ監修の第I巻は16-18世紀、コルバン監修の第II巻は19世紀、そしてクルティエヌ監修の第III巻は20世紀をあつかう。時代こそ異なるものの、いくつかの主題がこの三巻に通底している。

## 持続と変化

まず、科学とりわけ医学が身体構造と病をどのように捉えてきたか。古典主義時代の「体液論」であれ、現代の先端医学であれ、

健康の維持を図り、それを損なう疾病を予防し、治療することを目的にしていることに変わりはない。次に、セクシュアリティの領域。性がさまざまなタブーに束縛され、隠蔽されていた時代から、それが解放され、時には露出されるようになった現代まで、性的身体は大きな変革を被ってきた。病と性、苦痛と快楽——それは誰にとっても、身体性をもっとも強く意識させられる二つの体験ではないだろうか。

第三に、芸術と関わる身体がある。絵画やカリカチュアや彫刻は、人間の身体を特権的な表現対象にしてきたし、演劇、ダンス、バレエなどは身体を直接に表現手段とし、そこでは身体が言語として機能する。第四に、鍛えられ、訓練される身体。かつての軍隊や学校は身体を規律化し、従順な身体を形成する制度だったし、現代では競技スポーツが身体のパフォーマンスの極大化をめざす。

他方、時代によって変化する、身体社会性といえる側面も無視できない。たとえば、19世紀までであれば、キリスト教が西洋人の身体観を強く規定していた。そこでは身体が忌避され、蔑まれ、抑圧されてきた。身体は、宗教と欲望が葛藤を繰り返す舞台だったのである。20世紀になると、宗教の拘束力は大きく低下し、キリスト教と身体というテーマは取り上げられない。その代わり20世紀に特有なのは、高度医療による身体加工や遺伝子操作であり、大戦、強制収容所、民族虐殺などがもたらした、身体に加えられる未曾有の集団的暴力である。第三巻の第四部が「苦痛と暴力」と題されているのは、いかにも示唆的だ。

各巻をつうじて「身体技法」の提唱者マルセル・モースや、『文明化の過程』の著者エリヤスや、フーコーが参照枠になっていることに不思議はない。本シリーズは、身体史に見られる持続と変化を余すところなく析出させている。

(おぐら・こうせい/慶應義塾大学教授)

## 〈各巻構成〉

### 第I巻 (2010年3月刊) 16—18世紀 ルネサンスから啓蒙時代まで ジョルジュ・ヴィガレロ編 (鷲見洋一監訳)

- I 聖と俗と性と 身体、教会、聖なるもの/庶民の身体、身体のあるふれた使い方/アンシアン・レジーム期ヨーロッパにおける身体と性行動
- II 外化する身体 競技とエクササイズ/魂の鏡/解剖と解剖学
- III 正常と異常の狭間で 身体、健康と病気/非人間的な身体
- IV 力と美を備える身体 王の身体/肉體、優美、崇高

### 第II巻 (2010年6月刊) 19世紀 フランス革命から第一次世界大戦まで アラン・コルバン編 (小倉孝誠監訳)

- I 身体に向けられた交差する視線 医者まなざし/宗教の影響力/芸術家たちのまなざし/身体の社会的イメージ
- II 快楽と苦痛——身体文化の中心 身体遭遇/身体の痛み、苦しみ、および悲惨
- III 矯正され、鍛えられ、訓練される身体 障害のある身体の新しい捉え方/身体の衛生と外見を磨くこと/鍛えられた身体——19世紀の体操・運動選手

### 第III巻 (2010年9月刊) 20世紀 まなざしの変容 ジャン=ジャック・クルティエヌ編 (岑村傑監訳)

- I 人体と知識 医学と向き合う身体/遺伝子の身体創造と上演
- II 欲望と規範 性愛の身体/日常の身体/トレーニングする
- III 逸脱と危険 異常な身体——奇形の文化史と文化人類学/同定——痕跡、証拠、嫌疑
- IV 苦痛と暴力 虐殺——身体と戦争/絶滅——身体と強制収容所
- V 視線とスペクタクル スタジアム——観客席からテレビに至るスポーツ・スペクタクル/スクリーン——映画における身体/ステージ——踊る身体: 知覚の実験室/ヴィジュアルゼイション——身体と視覚芸術